

師走になり、令和元年もあともう少しとなりました。時が経つのは早いなぁと改めて思います。この一年を振り返ると、私は公私ともに充実した日を過ごすことができたと思っています。みなさんはどんな一年だったのでしょうか？

さて、今月私をご紹介したい本は『リスのたんじょうび』トーン・テレヘン著 野坂悦子訳 植田真画 偕成社 2018です。先月ご紹介した『ハリネズミの願い』と同じ著者です。しかし、『ハリネズミの願い』よりも文字が大きいことと、挿絵が多いので、『リスのたんじょうび』の方が読みやすいと思います。

『リスのたんじょうび』は「リスのたんじょうび」の他に「カタツムリのたてまし」「ほこりがひとつ」「サイのほしいものリスト」「ケーキぎらいのためのケーキ」「マッコウクジラとカモメ」「ごちそうのならんだテーブル」「仮装パーティー」「小さな黒い箱」の9つのおはなしで構成されています。そして、淡いタッチの挿絵は、やさしく包んでくれるようにこの本の世界に誘ってくれます。

「リスのたんじょうび」は、リスがブナの木の手紙をはがして自分のたんじょうびに招待する手紙をアリ、ゾウ、クジラなどさまざまな動物に送ります。そして、リスはいっぱい色んなケーキを作ります。一方で招待された動物は、それぞれプレゼントを用意し、おめかしして、たんじょうびに参加するのです。読んでみると、優しい気持ちになれます。この本の言葉の使い方が絶妙だなあと思わせてくれるところがあります。それは、“夜”の表現です。「～夜が起きあがって、森じゅうをしのび足で歩きはじめました。」「夜は夢見るような足どりで、動物たちがおどっていた空き地をぬけていきました。」「夜はかるやかに歩きましたが、地面をきゅうにふみならずこともありました。」「～あまい暗やみのなかにもどっていきました。」などの文章です。夜というと暗くてなんだか寂しいイメージがありますが、このような言葉の表現でファンタジーのような世界を感じさせてくれています。

「リスのたんじょうび」の他におすすめは「ほこりがひとつ」と「ごちそうのならんだテーブル」です。まず、「ほこりがひとつ」は、ヒョウのパーティーに招待されたキリギリスはマルハナバチのお店で“ほこり”を買うおはなしです。わざわざほこりを買って何に使うのかなあと期待しながら読むことができます。なぜほこりが必要だったのか分かったときはそんな使い方をするのかと驚かされました。“粋”なことを考えるなあと思えます。「ごちそうのならんだテーブル」は、リスとアリが森で散歩していると、

野原に食事のしたくのできた大きなテーブルを見つけるおはなしです。アリとリスは味見をしますが、このごちそうはたんじょうびのトンボが作ったものだったのです。リスはプレゼントをもってくると言い、好きなものは何か大声で聞きました。が、トンボはしげみの葉っぱのかげにかくれてしまったところでおはなしが終わるのです。トンボは謙遜していて、いじらしいなと思えました。あれこれ欲を出さない“足るを知る”も必要なことかもしれませぬ。

